

編集後記

K社N氏の校閲結果を見ると「バリ取り機」を「ダレ取り機」に修正すべしとのこと。各社代表の特集号編集委員の多くは修正の要なしとの判断で、結局「バリ取り機」に落ち着いた。しかし、ダレ取り機が決定的に誤りとは言えず、社内限言語一俗に言う現場用語が特集号編集の時に多く見られるようだ。

このような具合であるから、今回の特集号のタイトル「連続鑄造-熱間圧延の直結化」のうまいネーミングを受け、CC-DR, HCR, HDR をきちんと定義してから使おうとしたが、本件でも各社代表で微妙にその定義が異なつた。今回限りでもよいから、一応の指針として従来の加熱炉を経由しないで直接圧延するプロセスを CC-HDR (or HDR), 従来の加熱炉に熱片を装入するのを HCR と決めた。

言葉の定義はさておいて、直結化ができるということは、たいへんな連続技術の進歩と痛感するのである。十数年前の連続技術者は連続鑄片を無手入で次工程

最近の NICS の動きなどから、ややもすると我が国の影が何となく薄くなつていような気がしないでもない。しかし技術の分野では我が国の技術は、世界に強烈な影を落としている。今回の特集号でまとめられた“連続鑄造-熱間圧延の直結化”技術もその代表的なものである。特集号も今回で 30 回目の発行とのことであるが、鉄鋼プロセスにおける中心の大きな二つの分野をまとめて一つの特集号となるのは初めてであり、またまとめてこそ初めて大きな意義をなすユニークな特集号が誕生したといえる。

熱間圧延分野においても、直結化を実現させた圧延操業技術、設備開発結果、更には連続、熱間圧延の両分野を製鉄所規模で円滑な生産を実現させた直結化システムの開発結果、を中心に、15 編の投稿を受けた。

編集小委員会では、関係の皆様からいただいた校閲、査読結果の貴重なコメントをもとに議論を加えた。今

「連続-熱間圧延直結化」の討論会が企画されたのは、昭和 60 年春季講演大会の折である。提案はしたものの材料グループも含むと言われ非常に困つた事態であつた。熱片の直接圧延(ダイレクトローリング)、あるいは高温域からの加熱炉装入圧延(ホットチャージ・ローリング)が可能な鋼種はまだ限られており、討論会の内容は製鋼と加工プロセスに限られ、材料としての新規性のある発表論文は少ないと予想されていたからである。実際にダイレクトローリングが行われていたのは薄鋼板であり、厚鋼板は数 100°C の熱片の加熱炉装入圧延であり、材質的变化は従来プロセスによるものと大差なく、材料部門の発表は限られると危惧された。しかしながら企画が進むにつれプロセス

へ供給しなければいけないという使命感はあつたが、かなりの夢であつたと思われる。無手入が直結化の必要条件となるわけで、これを達成した製鋼技術者・研究者の努力と、それ以上にコンピューターによる直結のシステム化を確立したシステム技術者の努力が評価されると思う。今後ますます連続技術が革新的に発展することを望みます。

最後に編集者の苦情を少し言わせていただき「鉄と鋼」の向上に寄与したいと思う。文章及び図表とも良く吟味されていないというのが編集にたずさわつた面々の率直な感想です。大げさに言えば、忙しさは歴史に残りませんが、「鉄と鋼」は今後とも歴史を作つていくと思われまふ。忙しさを理由にせず長年苦勞して創み出した技術を論文にするのですから、もつともつと自論文を可愛がり、鉄鋼協会に郵送する前に良く推敲して欲しいというのが本音の編集後記です。

(T. N.)

回特に議論となつたのは技術用語の定義及びその統一的使用であつた。新技術に対して先行各社が独自の技術用語で対外的に印象付けを行うのは世の常である。

今回のこの技術についても開発されて十数年のものもあり、各社独自の用語も使われている。今回の日本を代表する技術の特集号にふさわしく、関係者の努力・協力により、大所高所からの統一的表现が試みられた。過去のホットストリップ分科会等でまとめられた結果を尊重しつつ統一の努力がなされたことは評価されると考える。

ここに報告された各技術は紙面に書かれていない技術の深さを持つており、それらを読み取り、更に発展がなされることを期待して編集後記とさせていただきます。

(S. S.)

によるマイクロアロイの効果の違いなど将来技術に挑戦する多くの研究が行われていることもわかつてきた。昭和 61 年秋季講演大会において開催された討論会は上工程から下工程まで一貫した同一テーマで行う初めての試みであつた。この討論会が予想をはるかに上回る盛況であり、本特集号発刊の運びとなつた。企画から既に 3 年が経過していた。昨今ではホットチャージが通常の製造プロセスとして取り入れられており、やがて理想的な加熱炉不在の直接圧延に完全に移行するのも間近いとさえ思われる。連続化技術が完成すれば、次は半凝固の加工の時代になるのも夢でないかもしれない。技術の進歩は限りないと痛感するしだいである。

(H. O.)